

29

曹炳章著『中国医学大成総目提要』について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『中国医学大成』の主編者・曹炳章(1877~1956)の字は赤電、浙江省鄞県曹妙郷の人である。最初は方曉安に学び、医に精通した。次いで光緒29年(1903)に何兼臣が創刊した『紹興医業月報』の編集を任せ、何氏に教授を受けるかたわら、葉、薛、呉、王の四家の温暑治法を会得することにより、医家としての名声を高めた。上海神州医学総会が成立すると、紹興分会の評議に関わり、薬品の改良を提唱するとともに、『医薬学衛生報』を創刊した。1920年に国医を廃止しようとする事件がおこると、紹興中医薬学会会長に任命され、南京に請願に赴いた。1922年に南京中央国医館名誉理事に任命されるも、取締りによって紹興に帰り、中医公会を設立して主席となった。また浙江国医分館が組織されると、理事に招聘された。一生涯、国医業務に尽力し、近代の著名な医学者となった。国医書籍の保存にも心を砕き、大東書局の要請に応じて、1936~1937年には膨大な医学叢書『中国医学大成』を編集し、あわせて所収書目解題集『中国医学大成総目提要』を刊行した。

『中国医学大成』は、当初の計画では13集365書となるはずであったが、実際に刊行されたのは、鉛印本134種のみであった(『中国中医古籍総目』による)。これらは1990年に岳麓書社から影印重刊された。更に曹炳章の精神を受け継ぐべく、同書肆から未刊行に終わった書籍を中心に『続編』(1992)、『三編』(1994)も編集刊行された。一方、1990年6月に上海科学技術出版社から裘沛然主編で原刊本134種の重訂活字本が、2000年にはその『続集』が刊行された。これとは別に1997年には中国中医薬出版社からも原刊本が重刊されている。

『中国医学大成総目提要』の冒頭に置かれた「編印中国医学大成縁起」には、先ず叢書編纂の動機として、医学書が高価で簡単に入手して研究することができないため、本叢書を刊行することによって、中国文化を発揚することを趣旨とするとある。曹炳章の「中国医学大成総序」に続いて、謝利恆、黄竹斎、陳存仁など当時の著名な国医多数が序文を寄せている。次いで「著者事略」「凡例」「編輯分類要旨」が置かれ、更に「中国医学大成分類総目」と題して、叢書所収予定の365種の書目並びに著者と底本を、医経類、薬物類、診断類、方剂類、通治類、外感病類(傷寒叢刊、温暑叢刊、瘟疫叢刊)、内科類、外科類(外科叢刊、傷科叢刊、喉科叢刊、眼科叢刊)、婦科類、児科類(児科叢刊、痘疹叢刊)、鍼灸類(鍼灸叢刊、按摩叢刊)、医案類、外集(医論叢刊、医話叢刊、医史叢刊)の13のカテゴリーに分類して列挙している。

本論では、書目ごとに著者、版本、提要が述べられている。底本には、『黄帝内経太素』、『鍼灸素難要旨』などのように、日本から逆輸入されたものが使用されているものもみられる。書誌については多紀元胤著『医籍考』をしばしば引用するなど、日中の資料を駆使した水準の高い解説が行われている。なお鍼灸類に明抄本『甄氏鍼灸経』一卷が採録されていることが注目されるが、これは『中国中医古籍総目』にも著録されておらず、原本の存否などは未詳である。

『中国医学大成』は、国医の地位が中医廃止論で脅かされていた状況を打破する目的から刊行された重要な資料である。また『中国医学大成総目提要』の研究水準は高く、中国医書を研究するうえにおいて、大変重要な資料である。